

昭和52年5月25日 第3種郵便物認可 令和2年6月10日発行(毎月1回10日発行)



世界の円満
人類の福祉

THE ENPUKU

6月

2020 No.477



世界法民連帯 円福友の会

円福友の会入会のすすめ

1食1円のSABA運動で世界の平和に尽くしましょう。

SABAとは、禅寺の僧堂でお食事の前に、七粒ほどのご飯をお膳のすみに取っておき、後で小鳥に施す「生飯(さば)」というお作法のことです。

これを日本の皆さんの1食1円のSABAとして、アジアの貧しい国々の子ども達のために学校建築(教育)や、井戸やトイレの設置(環境衛生向上)を支援する、国際ボランティア資金の運動です。1食1円ならどなたにもできます。塵も積もれば山となるように、皆さんの御協力をお願いする大きな愛の運動です。(この運動は、特定の政党や宗教や思想に関係のない、非営利の国民運動です。)

綴じ込みの郵便振替用紙を使い年会費やSABA運動等の協力金をお送りください。お送りいただいた皆様には毎月『圓福』と『おもいやり』をお送りし、円福友の会の活動と円福寺愛育園の子どもたちの様子をご報告いたします。

表紙の写真

ナチュラル小学校の教育実践の名声が、地域の学校や社会の評判となりサロン校長は、ブレアビヒア県の教育省大臣から表彰を受けました。(本文6p参照)

サロン校長の左胸に下がっているメダルをご覧ください。

この表彰は、ナチュラル小学校の実践が周囲の小学校や地域に広まることを狙っています。

円福友の会の支援がこのような形で周囲から評価されていることは大変うれしいことです。

6月号の内容

ここにこ法話 落とし穴	1 p
エコ村支援 ナチュラル小学校からの便り その9最終回	3 p
教育随想 長野高校(2)	8 p
敬愛信	12 p
おっしゃんの修証義解説	15 p



どうも社会には落
とし穴がたくさんあつ
て、人が落ちるのを
待っているようです。

私の母は、生前「人
生には落とし穴がある
から、気を付けなさい」と口を酸っぱくし

て言い聞かせてくれ
ました。落とし穴は、
その上に草をかぶせ
て分からないように

して人が落ちるのを狙っていますから、
よっぽど気を付けなければなりません。

四十年ほど前に中高交流人事で勤務し
た櫻ヶ岡中学校は、櫻中会（ちやうちゅうかい）といって、勤
務経験のある職員と現役職員の交流会を
開催していました。櫻中へおいでと大町
高校まで私を迎えに来てくれた依田公一
校長先生は豪放磊落な方で、自分は特攻

落とし穴

隊の生き残りで、原爆で焼けた広島の上
空を飛行機で松本まで帰ってきたと話さ
れていました。月曜日の全校朝礼の内村
鑑三の「後世への最大遺物」のお話は、
壇上から約千三百人の生徒に訴えかける
迫力ある素晴らしいもので、私の心に今
も強く刻まれています。先生は退職され

て十年ほどたった櫻
中会で私たち後輩の
ために講演されまし
た。『殺身四鬼』の
お話でした。世の中には四種類の鬼がい
て、常に君たちを狙っているから気を付
けなさい、特に四十過ぎてからが危険だ
よ。

『四鬼』とは酒色財氣です。酒色財氣
は分かれますよね。気は病氣です。新聞
に掲載される不祥事は、たいいてい『四鬼』
に人生を殺されています。当時私は四十

を過ぎたばかりでしたので「四十過ぎてから」は不思議でした。もつと若くたって同じじゃないかなあ。でも、四鬼に狙われ、やられる多くの人は確かに四十過ぎです。

高校に勤務していたころ、教員の不祥事が続いて、各学校で綱紀の保持にかかる職員研修をしないというお触れが出て、つくば研修で教わってきたことを職員に話しました。

危機管理の基本認識

一、危機管理で大切なことは「知識」よりも「意識」だ
危機管理意識があれば危機は十分回避できる。

「危機管理意識」とは
『ちよつと変だな…?』『本当に大丈夫

夫かな…?』
と思う意識である。

二、危機管理は誰のために、何のために必要なのか

「危機管理」は誰の為でもない。「自分と自分の家族を守る」ためにある！
三、「不正行為」を抑止する行動規範はこれだ！

①無知から不正行為をする者はいない

②「誰も見ていないだろう」「誰にも分らないだろう」という気持ち
ちが不正行為に引きずり込む

『いつも「誰かが見ている！」「誰かに見られている！』』と思え

それにしても殺身四鬼は怖いです。

煩惱の毒蛇眠って汝が胸にあり「お
お、くわばらくわばら」

工 コ 村 支 援

エコ村支援 ナチュラル小学校からの便り (その9 最終回)

円福友の会顧問 吉田恒昭

今回が「ナチュラル小学校からの便り」の最終回となります。実は、筆者は数年前からナチュラル小学校近隣集落コミュニティの能力強化を目的とした『村祭り』のようなイベントの開催を支援できないものかと考えていました。彼らに企画・実行組織づくりを任せて、友の会が費用の一部を負担して円福ツアーと村人の交流会を兼ねて、村人と児童達がパフォーマンスを披露するというアイデアです。村祭りは、経験的にも学術的にも、村落共同体の組織づくりや能力強化には最適で

あると言われていました。従って、今回の学校祭実行のニュースを突然知った時は『まさか、本当に?』と半信半疑でした。そして送られてきた写真を見て、その内容と成果に目を見張ったのでした。

今回のナチュラル小学校での学校祭は「村人の村人による村人の為のイベント」に他なりません。それも単なる遊興的な食事会ではなくて、寄付金を募り、村人自身による植樹に加えて、校庭や校門道路整備などの児童達が抱える課題解決のための事業が含まれて実行されたことに大きな意義があります。つまりコミュニティ構成員の参加と合意形成で自主的に計画執行されたことが何よりも尊いのです。

思い起こせば、円福友の会のエコ村支援活

動は2012年にナチュラル小学校に1基の井戸掘削を支援したことが始まりです（写真①）。そして2013年11月の第1回カンボジア国際支援ツアーの名のもとで、パゴダと農家へも井戸を寄贈し、植林も行いました。そして、第4回円福ツアー（2016年11月）が学校農園開所式に参加した時には、井戸支援を受けた村人たちと児童が精一杯の自助努力でツアー参加者を歓迎してくれました（写真②③）。その後も『水ある処に仏あり』のキャッチ・フレーズで円福友の会の会員の



① ナチュラル小学校1号井戸 2012年



② 歓迎してくれた農家の人たち 2016年



③ 円福ツアーと井戸設置農家 2016年

皆様からの浄財を頂いて農家への井戸設置を続けると共に学校農園整備を含めて、村人た

ちが連携共助する姿を見守りながら彼らの活動を支援してきました。

円福友の会支援の手段と目的は、村人たちの自助・共助努力活動を支援して、村人たちの生計向上と共助能力の強化をし、彼らの自立化を助けることです。今回実行された学校祭は、開村以来の約10年間で村人たちの間で信頼が醸成され、互助精神が生まれ、それらが発揮された成果です。この小さな集落の大きな成果に少なからず貢献してきた円福友の会の支援活動は大いに誇りうるものだと自画自賛の思いです。

しかし、円福友の会支援の農家が全て順調な成果を挙げていたわけではありません。2019年末現在で、合計22基の井戸設置を支援し、農家は18軒です。現時点で18軒の農家のうち3家族が離村しています。これらの離村家族にはそれぞれに個人的な止むにやまれぬ事情があったことでしょう。

先月号でも触れましたが、ここ数年間、ソ

ファットさんは彼自身の事業不振と体調不良でエコ村訪問指導がほとんど出来ていません。昨年予定されていた事業で、宮田芳光さんがご紹介してくれた茨城5人組女性寄贈の井戸、さらに筆者のアジア開発銀行時代の同僚の坂井和・真紀子さんの寄贈の井戸、そしてニューヨーク在住の尾崎明子さんの浄財で予定している児童図書の寄贈などです。1年前には藤本住職が直接ソファットさんとキムさんの3人で面談し、滞っている事業再開を図りましたが進展しませんでした。今年に入ってから、体調不良のソファットさんのアドバイスを直接受けながら、友の会の強力なパートナーのキムホンさんが未完の井戸2基と児童図書寄贈の事業を引き受けてくれることになりました。しかし、最近のコロナ災禍でカンボジアでも国内移動が制限されており、キムホンさんも動けません。もう暫くの猶予を頂きたく本件事業に直接ご寄付を頂きました方々にはこの場をお借りして遅延のお

詫びをさせて下さい。

今月号まで9回連載で友の会会員からの布施（浄財）がこれまで約8年間にわたり、どのように生かされてきたかを見てきました。劣悪な環境の下で、先生と児童達が自ら荒地を切り開き、篤農家のラットさんやドイソクさんの指導を得ながら、エコ村に適した農法を教え学んできました。そして収穫した野菜や果物を皆で分け与えられるのみならず、

毎年収穫期にはパゴダの仏様に多くの寄進をできるようになってきたのです。円福友の会の浄財がエコ村の仏様と繋がりました。このようなサロン校長を中心とした近隣コ



④ 大臣から勲章授与のサロン校長(右)

ミニニティにおける持続的自立的成長の成果は、プレアビヒア県の教育局の知るところとなり、その推薦を経て、サロン校長は教育省大臣から優秀校長勲章が授与されたというニュースが3月に届きました（写真④）。筆者にとつては学校祭の成功に加えて二重の喜びになりました。

これまで述べてきたナチュラル小学校近隣コミュニティでの自立的持続的な開発成果を踏まえて、円福友の会のエコ村支援の方向を再検討する機会にしたいと思います。とりわけ筆者の現地視察と指導が健康上かなり困難になってきてしまいましたので、何とか知恵と工夫を凝らしながら、藤本住職の指導の下で、今後のあり方を現地パートナーのキムホンさんやソファットさんと相談しながら進めたいと思っています。

10年前にお互いに見知らぬ孤立した家族たちが入植してできた集落に、新しい小学校校舎が建てられました。そこには井戸もトイ

レもなく、ベニヤ板を黒板に代用し、文具もわずかな児童達の姿を目の前で見て、円福友の会の支援は始まりました。学校と農家への井戸支援の効用は抜群でした。井戸が健康を維持し、人を集め、交流し、生活と農業を向上させ、学校にトイレを設置したことで女先生が赴任し、母親たちの集会も教室で可能となりました。筆者の住まいに近く孫たちが世話になっていて豊島区千早区民広場において、カンボジア児童達の為に、植林の大切さと学校農園造りを主題とした二本の紙芝居を製作して頂きました。これらの紙芝居をナチュラル小学校の先生方と地元の大学生に上演してもらいました。上演した紙芝居のストーリーが児童達によって現実に実践されて成果を挙げていることは、仲介を担った筆者にとつては奇跡のように感じられます。そして井戸設置を支援された篤農家達が学校農園を支援し協働する繋がりが生まれ、保護者たちが繋がり、それは僧侶や役場の人のみなら

ず近隣学校の先生をも巻き込んだの主体的な学校祭（食事会＋植樹＋校庭整備普請など）に結実したのです。

筆者は半世紀に渡りアジア途上国の開発協力的一端に、いろいろな立場で携わってきました。その人生行路の延長線上で、定年退職後10年間にわたり円福友の会のエコ村開発支援ボランティア活動に関与させて頂きました。この誌上でしばしばお話したように、エコ村支援活動の成果は素晴らしいものです。例えば貧者の一灯であっても、国際開発協力の真髄に迫る成果であると誇らしく思います。かくも貴重な機会を筆者に与えてくれた円福友の会会長の藤本住職と布施心に溢れた会員諸氏の皆様に改めて甚深の御礼を申し上げます。合掌。



教育随想

心の教育

長野高校（2）

学力問題

長野県の高校生の学力が問題になったのは、平成二年（一九九〇年）でした。私が長野高校で教鞭をとったのが昭和五八年（一九八三年）から六三年（一九八八年）でしたから、転出して二年後です。

この年（平成二年）の八月から信濃毎日新聞では「だいじょうぶ学力」として、特集記事を組んでいます。その（一）を紹介しましょう。（屋代高等学校 理数科の歩み（総括）平成七年度理数科委員会 202p）

学力をめぐる論議が、県下で急速に高まってきた。現役の大学進学率低迷などをきっかけとした「学力低下への懸念は、県教委や県高校長会、高教組など教育関係団体はもちろん、産業界や市民団体を巻き込んだ広範な動きになった。が、論議は一面で、各団体間ですれ違い、不

毛な論争、対立を招きかねない。今何が問題となり、どんな反響が起きているのか。学力論議の行方を追った。

「長野県はもはや教育県ではないといわれている」

長野市のホテルで昨年十一月開いた県高校長会の秋季総会。普通科の小平恒彦部会長（当時豊科高校長）が意を決したように発言した。公私立百六校の校長たちは聴き入った。「今こそ、県下の学力の実態を数値的に明らかにした学力白書をつくり、県民全体に論議してもらおう必要がある」

四年制大学への現役の進学率の低迷。いわゆる難関校の合格者数の落ち込み……。県会論議などで時折さざ波が立っていた「学力問題」は、学校現場内のこの提言をきっかけに、一気に大きな波となった。

敏感に反応したのは、県PTA連合会。総会から三週間たたない県教委との懇談会で、保護者を交えた「学力問題協議会」を設置するよう県教委に要請。次いで、県高校長会も「学力問題特別研究委員会」の設置を決めた。

論議に一層の拍車をかけたのは、信濃教育会の機関紙、月刊「信濃教育」（一月号）に掲載された論文「高校教育と卓越性問題」。松本市出身の耳塚寛明・お茶の水女子大助教教授は東大、京大の合格者率を「指標」に全国を類型化。長野の水準は「地域の文化的、経済的活力を乏し

くする危険性をはらんでいる」と大胆に指摘した。

人材確保に危機感を抱いていた県経営者協会は、耳塚論文に飛びついた。四月の定時総会で、研究に着手すると決定。六月には経営者への高校教育アンケートに乗り出し、現行の十二通学区制の問題点を洗い出し始めた。

「全面発達と個々の進路希望の実現に不退転の決意で臨んでほしい」。四月中旬、県立高校長会議が開かれた県庁講堂に藤本三郎即教育委員長の声が響いた。

県教委は新年度、初の学力向上推進事業に着手。プロジェクトチーム「学力向上企画推進委員会」、実態調査やデータ分析の調査研究委員会を相次いで発足させた。さらに、県立高校二十四校を、学力向上推進校に指定した。

一方、県下の県立高校教諭の九三％組織率を誇る県高教組。「学力問題は教育の基本問題であるだけに、避けて通ったり、軽視すべき問題ではない」。五月下旬の定期大会で、山口光昭委員長は約二百人の代議員を前に訴えていた。当初、高校長会の問題提起を警戒していた組合の対応は、微妙に変化していた。

現在、高教組は「学力問題」に最も精力的とさえいわれる。七月から、社会党県議団をはじめに県高校長会、県教育委員会らと立て続けに懇談。「絶縁状態」にあった信濃教育界とも今月二十七日、三十年ぶりに公式な意見交換をした。

県教委の「学力向上企画推進委員会」、県経営者協会も独自に意見聴取、各団体入り乱れて

の「懇談合戦」の様相だ。

市民団体も動き始めた。義務教育の校長経験者らでつくる「教育を語る会」が三月、つどいを開催。教師や父母らでつくる「長野県の教育を考える会」も七月下旬集会を開いた。松本市在住のPTA役員経験者らも会議を発足。長野県生協の教育サークルも勉強会を始めた。

「県下の学力実態はどうか」「低下しているとすれば、どこに原因があるのか」「いま何をなすべきなのか」。教育論議のうねりは、どこへ行くこうとしているのか。

四月号に書いたように、私が赴任したころの長野高校の現役進学率は四割を切っていました。現役東大合格者は三名ほどだったと思います。

今、読み返してみても、このころは学力問題という切り口で、県民がこぞって高校教育問題を論議していたことを知りました。懐かしく思い出しました。

今、県が取り組んでいるのは第二次高校再編問題です。高校再編問題を通して、急激に進む少子化の中の高校の在り方を探らなければなりません。正面切って学力問題を扱うことは無くなつたと思います。

敬愛信

春の淡雪

四月号のここにこ法話（裾花の薫）で紹介した「春の淡雪」の楽譜に、大学時代の友人の小林茂雅君が高校の恩師の親戚の方をお願いして、ピアノで弾けるようにアレンジしてくださいました。

藤本幸邦作詞、大久保優美編曲です。楽譜を掲載しましたのでご覧になってください。楽譜を見て愛育園でピアノを習っている中2の女の子が弾いてくれました。それをホームページで



聴けるようにしました。円福友の会の月刊圓福のページを開いてくださいね。

「裾花の薫」はあちこちから反響をいただきました。ありがとうございます。

寺誌

深志に勤務させていただいたご縁で、松本市里山辺の廣澤寺さまから「龍雲山 廣澤寺誌」をいただきました。コロナで時間があつたので、五年の月日をかけて作成した、A4版330頁の分厚い寺誌を読むことができました。併せて、以前いただいた龍洞院寺誌や閑田院五百年史も読み、較べてみました。

道元禅師さま、瑩山禅師さまからつながるお祖師さまは凄いです。桐田幸昭著「閑田院五百年史」に登場する禅師を紹介しましょう。

禅師は信州上田の出身で天台

宗、臨濟宗のお寺で修行に努力を注いだ後、梅山問本禅師の許で参禅弁道し悟りを開かれ師の法を受け継ぎました。師は「お前はこれから俗人の来ない山の奥に入つて草庵を造り、現在お前が体得した悟の境地をさらに深めなさい。徒に慌てて俗人に禅を話したり文字にしてはならない」と強く戒めました。

如中禅師はその教えを堅く守つて深山を探しながら修行に専念すること三年に及びました。有為の青年僧が秘かに如中禅師の庵に集まつてきてしまいましたが、それでそこを抜け出して小庵を作ること三度、いずれも学徒に発見され僧俗が集まつ

て、ついには庵の門前に市をなす、土庶多数が列をなすに至つたそうです。禅師は遂に静岡県周智郡森町に大洞院を開いて弟子の養成に全身全霊を注いだところ、集まつて僧侶になろうとした人材は実に七千余人に及んだといひます。

昔は、今のように暖房があるわけではなく、庵は風が吹き込み、夜は真つ暗の深山幽谷で坐禅に励む様子を想像すると本当に凄いと思ひます。そのような大勢のお祖師さまがあつて今の我々があることを思うと、襟を正します。

新型コロナウイルス

非常事態宣言が解除になり、子どもたちが登校できるようになりました。嬉しいです。でも油断せず、緊張感をもって予防に努めましょう。早く元の生活に戻れることを願っています。



春の淡雪

藤本 幸邦 作曲
大久保 優美 編曲



おっしゃんの修証義解説

②²¹ 衆生しゆじようを利益りやくすというは四枚しまいの般若はんにやあり、一者ひとつには布施ふせ、
ふたつにはあいご、みつにはりぎよう、よつにはどうじ、こすなわち薩埵さつたの行ぎよう、
二者ふたつには愛語あいご、三者みつには利行りぎよう、四者よつには同事どうじ、是れこすなわ即ち薩埵さつたの行ぎよう、
願がんなり、其その布施ふせというは貪むさぼらざるなり、我物わがものに非あらざれ
ども布施ふせを障さえざる道理どうりあり、其物そのものの軽かるきを嫌きらわず、其その
功こうの実じつなるべきなり。

21. 一つには布施

ここに世のため人のためにつくす四つのおさとしがあります。一つには布施、すなわちほどこし、二つには愛語、すなわちいつくしみの言葉、三つには利行、すなわち社会の利益、四つには同事、すなわち誰とも仲よくする。この四つが仏教徒の心がけであります。布施とは社会奉仕、世につくし人にほどこす善意のおこないであります。この布施を行うには貪慾な心があってはできません。私慾をはなれて布施を行おうとすれば、よし自分の力は及ばなくても、みなさんによびかけて社会のためにつくすことができます。どんなに小さい善意でも『長者の万燈より貧者の一燈』で、布施とはその物の多少ではなく、その布施のまごころが社会を明るく照し、この世を美しく幸福にするのであります。電車の中で老人に席をゆずるのも布施、親切に道をおしえてあげるのも布施、近隣の子供にお菓子をあたえるのも布施、愛の献血、共同募金はもとより、施設慰問、災害たすけあいをはじめ、小さい善意ならば、いつでも、どこでも、だれにでもできる布施行であります。その布施行こそ、仏教徒としてつとむべき、大事大切な心がけであります。

円福友の会・SABAスクール

愛の日の丸 SABA運動

カンボジア小学校校舎建設

カンボジア エコ村支援

タイ スラム街奨学生支援(教育里親)

大災害被災地支援

シャンティ国際ボランティア会協力

おもいやりの会(愛育園児童自立支援)

太平観音堂護持発展

円福友の会入会のすすめ

上記の協力金は 郵便振替 00520-7-16256

加入者 円福友の会 あてに御送金下さい

〒388-8005 長野市篠ノ井横田 円福寺内

TEL 026-292-0381

FAX 026-293-9629

<http://ryu-enpukuji.com/tomonokai/>

enpuku2@janis.or.jp